

「原爆と人間」をめぐる問いと答え

——「証言」運動と生活史研究の接点から——

東村 岳史

1 はじめに

一昨年の本誌に掲載された拙稿は、「長崎の証言の会」創設初期の動向を、鎌田定夫を中心に考察した。拙稿末尾で今後の課題としてあげたいいくつかの点に立ち返り、その一つである「被爆体験の思想化」について本稿では考察してみたい。

「証言の会」創設の直接のきっかけは、厚生省の「原爆白書」（一九六七年）の「国民一般と被爆者の間には著しい格差はない」という結論への異議申し立てであることはすでに述べた。被爆者の証言が数多く寄せられたことに、会の中心メンバーは手ごたえを感じていた。そうでありながら、それと同時に、『証言』誌に寄せられた証言は、被爆者全体の数からすればごくわずかなものにすぎないことも、メンバーたちにはわかっていた。「沈黙の壁」を破ることが期待されながらも、多くの被爆者は依然として「沈黙」を保ったままだったのである。

そしてそれは単に数の問題としてではなく、「沈黙」に隠され

たものは何かをさぐり、運動に接続していくためには何が必要か、という問題意識として再設定されていく。そのような折、「証言の会」のメンバーが知ったのが、石田忠を中心とする一橋大学の被爆者調査であった。石田らは、「証言の会」ともゆかりのあった福田須磨子ら被爆者の生活史から、「漂流」から〈抵抗〉へ」というテーゼを導き出し、「証言の会」のメンバーにも影響を与えた。その後「漂流」から〈抵抗〉へ」という文言は、「被爆体験」が「思想化」へと至る道筋としても理解されている向きが強い。本稿では、「証言の会」と一橋大の接触を、各々の中心人物である鎌田定夫と石田忠に重点を置いてみていくことにする。

一昨年の拙稿で述べたように、筆者が鎌田に寄せる関心は、非被爆者としての彼の運動への関与の仕方にある。石田もまた非被爆者でありながら、被爆者の調査に熱心に関わった。鎌田も石田も、被爆者に寄り添い「被爆体験の思想化」をめざすという点で、両者はきわめて似通った志向を持っている。両者の共通点を強調するか相違点を強調するかによって議論の方向性は異なってくるであろうが、本稿では共通性を見た後で違いをみていく。

被爆者の「沈黙」に関する言及は、『証言』誌や関連文書の中にも散見される。瀬戸口千枝「なぜ黙ってしまったのか——身障者として生きてきた教え子T子へ」は、副題が示す通り、戦後障害者としておそらく不遇をかこちながら生きてきた教え子に、著者の瀬戸口が体験記を書くように促しながらはたせなかつた際の覚書である。瀬戸口自身も戦時中女学校の教師として働いていたときに被爆、その体験を「長崎生活をづる会」の会員として『熱い骨』（一九五九年）で詳述している。瀬戸口は「彼女はまた黙ってしまった。なぜなのだろう？ 逃避しなければならぬ彼女の気持をあれこれと考えてみたが、それも結局はわたしの憶測にすぎない」とし、教え子が思い直して「九死に一生を得て生き残った者として、あの原爆の恐ろしさを体験した人間の生活記録を書き残すことが自分の義務である、という理解が持てるようになったらどんなに力強いことであろう」と惜しんでいる⁶⁾。

『証言』誌の中にはないが、創設初期に「証言の会」が並行して刊行していた別の書籍の中にも、被爆者の「沈黙」や「拒絶」をめぐる記述がある。田川清光「炎の中から——被爆衛生兵の証言」のあとがきで、鎌田定夫はこう書いている。「田川さんの集めてこられた証言や記録の一つ一つを再吟味し、何人かの証言にたいしては再度足を運んでもらい、現在の時点に立っての新しい証言を重ねあわせて、その証言価値を高めようとした。その結果、以前発表された奇形児や精神分裂病（ママ）に苦しんでこられた

生存者たちからのきびしい拒絶が示されるなど、あらためて原爆の残した爪痕の深さに、田川さんと私は頭を垂れ、みずからも深く苦しまねばならなかった」⁷⁾。松野秀雄『太陽が落ちる——被爆記者の証言』では、著者の松野が自分の妹の態度について、「妹はそれを思い出したくないのだ。原爆に関することは新聞もテレビも見ない。妹の前では原爆の話は一切タブーなのである。被爆の証言を拒む妹にとつて、原爆は今なお耐えがたい恐怖として生きているのであろうか。私のペンもまた重くなつてくる」と記している⁸⁾。

これらの例からうかがえるのは、被爆者であっても、あるいは被爆者の身内であっても、被爆者の「沈黙」や「拒絶」を打ち破るのは困難であるという事実である。いいかえれば、「沈黙の壁」は被爆者と非被爆者の間にだけではなく、被爆者たちの中にも存在する。しばしばいわれるように、辛い体験をした人ほど語りたがらない傾向があり、障害や差別に苦しんできた人たちの口を無理やり開かせることには、抵抗があるだろう。前述の瀬戸口の引用にしても、彼女自身が壮絶な場面を目撃し戦後苦労して生き延びた体験を持ちながらも、他の被爆者の「沈黙」については勝手に断定は慎んでいる。そして「沈黙」の極点として「証言」を残す機会もないまま亡くなつてしまった爆心地に近い死者の存在が想像されることもある。「沈黙」が死者の領域に近づくものとしてイメージされることもあって、その領域に勝手に踏み込むことは、被爆者であつてもためらわれる場合がある。

このように、被爆者にとつても非被爆者にとつても、「沈黙」とは容易には踏み込みがたい課題として残される。そして、「沈

黙」が解消されたかどうかは、被爆者が発話したり手記を著したりしてはじめて、あくまでも事後的にしか判断できないものである。これを「証言」運動にあてはめれば、「沈黙」を破るのは会としては被爆者が手記を書いてくれるのを待つしかない、ということにもなる。それでよいのか、何かできることはないのか、という手がかりを、「証言の会」のメンバーは求めていたようである。「証言や調査を拒否する心こそ、もつとも強烈なテーマだと思おう」(一九七二年：引用者補足) 以来もつとも重いテーマとしてみんな意識している」⁶⁾と困難を感じていた折に、「証言の会」のメンバーは石田忠ら一橋大の調査チームと出会う。

石田はもともと厚生省調査チームに関わっていたが、「証言の会」のメンバー同様その方針に疑問を持ち、自分独自の視点から被爆者の実態を明らかにしようとして長崎調査を始めた。石田忠『反原爆』の発刊は一九七三年八月であるが、石田らはその前年一月に「証言の会」のメンバーに会うため長崎を訪問した。山田くんが「証言の会」の通信に寄稿した一文によると、一橋大の石田忠と栗原淑江が来訪し懇談会をもつた際、山田自身は出席できなかったが、石田から送られてきた対談記録を読んで感銘を受けたという。「この中には多くの問題点が提起されていることも、「証言の会」の今後の活動の方向として取組まねばならぬ部分が含まれていた」と述べる中でも特に、石田が被爆者の「拒否」に向き合う姿勢に山田は考えさせられた。石田は、何故に被爆者が表現を拒否したり復元調査に否定的な態度を取ったりするのか、「証言の会」と同じく苦勞しながらも、「拒否する態度というようなもの、やはりあの、これも被爆者の方の要するに思想化の営為

であろう」と発言したそうである。これを受けて山田は、「証言を拒否する姿勢の中にもひとつの思想化の過程としての営為を認めるところにも、我々が欠落させてきた部分の復元が求められているのである。また証言という表面に出てきてない部分が大なる層を占めつづけており、それは「何が」そうさせてきたのか、あの被爆によって「何が」拒否するという心に作用し、そのように突き崩してしまったのか、ということを平静にとらえなおすことは重大な問題なのである。体験の伝承ということが若し可能なのならば、そこまでの視野の拡大においてこそなされるべきなのであると思う」と書いている。⁶⁾

山田ら「証言の会」のメンバーに省察と視点の転換をもたらした石田の研究は、『反原爆——長崎被爆者の生活史』として出版された。石田はこの本の序文を「(原爆) のもつた最大の意味は、それが原爆否定の思想を生み出したというところに在る。この思想形成の必然は被爆者の(生) そのものの中に在る」と書き出している。石田は序文の中で、被爆者が体験を思想化していく過程、その過程に見られる二つの型、そして非被爆者の受け止め方について述べている。石田は(体験) とは決して受動的なものではなく、人間が意味連関を構成していく主體的な営為としてとらえる。少し長く引用する。⁶⁾

かくて(原爆体験)とは(原爆)が人間に対してもつ意味を確定しようとする思想的営為にはかならない。(原爆)とは人間にとって一体何であるのか。この人間の視点が被爆者をして(原爆)の本質へ向かって立ち立てる。この思想的営

為として彼らの「原爆体験」が構成される。それは言わば思想化された「原爆」である。この「原爆」にうたれるが故に、被爆者の「原爆体験」は私たちに強い衝撃を与える。私たちは被爆者にふれることによつて被爆するのである。

「原爆」に関する事実を知ることによつてもまた、私たちは衝撃を受ける。それは、これらに基づいて、私たちがまた「原爆」を体験するところがあるからである。その思想的営為がすでに確立された筈の己れの思想体系をゆさぶる。その時私たちは激しい衝撃を感ずる。

被爆者の思想は、かかる意味での「原爆体験」を内包する時にのみ体系としての完成を見る。いわゆる「原爆体験の思想化」とはこの謂でなければならぬ。そうだとすれば、体験とはこの思想化過程の一面をなすものにはかならない。

被爆者の思想的営為は、基本的には、これを大きく二つの型に分けることができる。一つは「漂流」の型であり、他は「抵抗」の型である。(中略)

かくて、被爆者における「漂流」から「抵抗」への飛躍は、生活者としての彼らの立場からの必然である。その「立場」が被爆者の思想的営為を方向づける。「被爆者の存在」の克服の方向が即ちそれである。ここに思想の「原点」が確定される。被爆者の「立場」は同時にその存在性を取りこえる「立場」となる。

しかし、「抵抗」の被爆者といえども、なお依然として「漂流」への社会・心理過程とそれを支えるメカニズムの中に生きるのである。かくて被爆者は、その心の中に、彼らをして

たえず絶望と虚無とへ漂流せしめる力と、これに抗つて己れの再生を遂げようとする力との、二つの力の拮抗を経験する。しかし、被爆者の内面におけるこの対抗は、実は、被爆者の外部における国民社会規模での対抗を反映するものにはかならない。そうだとすれば、「漂流」から「抵抗」への飛躍は、この対抗の一方をなす主体としての自己形成でもあるのである。それが「反原爆」の思想である。

鍵概念をへで囲み、被爆者の内面、被爆者から非被爆者への影響、被爆者と社会との関係、を行き来する独特の文体は、被爆者の「思想化」を述べながら、石田自身の「思想化」を特徴的に示しているもののように私には読める。後に「原爆と人間」として定式化される原型である。石田のいう「人間」について、八木良和は「被爆者の「抵抗」へと連なる精神のありようを「一般化」しようという意図が「人間」という言葉には込められている」、「非被爆者であっても、「人間」という地平で、被爆者と同じ立場に立てることを石田は提唱している」と読解する⁷⁾。非被爆者として出発しながらも、同様の状況では被爆者同様「精神的荒廃」に陥る可能性を看取しそれを回避するよう努力することが非被爆者にも求められることであり、「人間」の基本的な作業⁸⁾として協働する目標となるからである。

「人間」という共通の地平に立つには、「私たちは被爆者にふれることによつて被爆するのである」というほどの強烈な「衝撃」を非被爆者は受けとめなければならないことになる。拙稿でもふれたように、鎌田定夫も「精神的被爆」という似通った言い方を

していた。彼は「死者たちの遺恨をひきつぐ被爆者」と非被爆者の強固な「反原爆同盟」を構想し、「非被爆者」未被爆者にとつて、それは、みずから、被爆国民¹⁶のひとりとして精神的被爆をとげ、被爆者、とりわけ二重三重に疎外された朝鮮人・中国人被爆者や撲殺された米軍被爆捕虜たちの怨念と怒りを、自己の思想的核、反原爆へのバネとして生き、たたかうことによつてのみ、合流しうる道である¹⁷と述べた。当時石田と鎌田がどのように影響し合つたのか、鎌田にもともと「精神的被爆」という発想があつたのか（「ごころの被爆者」という言い方はその原型と見なせるかもしれない）はつきりはしないが、二人の文言に非被爆者として呼応するものを感じ取ることは難しくない。

石田らの座談会における問題提起や『反原爆』における「発見」は、「証言の会」のメンバーにとつて、「沈黙」や「拒否」に対する認識への反省を促すものとなつた。なぜなら、もし「漂流」から「抵抗」へ¹⁸という見方を「必然」のものとして採用するならば、「沈黙」「拒否」は（漂流）期の一時期の状態であり、次期の（抵抗）期への準備期間と解釈できるからである。そうであれば、「沈黙」「拒否」を消極的態度と見なすことは、被爆者の成長の可能性を見誤つてことになる。「沈黙」「拒否」は貶められるべき状態ではなく、むしろ孵化前の必要な過程にすぎないのかもしれない。あらためられるべきは、「沈黙」「拒否」している被爆者ではなく、「沈黙」「拒否」をネガティブにしか評価できない周囲の人間ということになる。見るべき人が見れば、「沈黙」「拒否」にも（抵抗）の契機を見出すことは可能である、という論理が成立する。とりわけ、石田が「漂流」から「抵抗」へ¹⁹とい

うテーゼを導き出したのが福田須磨子の生活史に依拠しているということは、福田の著作に対して不満を感じる旨のコメントを寄せたこともある鎌田にとつて重大な課題になる。鎌田の福田に対する不満は、福田の文章の不足ではなく、鎌田の読みの不十分さによるかもしれないからである。あるいは、石田の言い方を借りるなら、「被爆者にふれることによつて被爆する」際の「衝撃」がまだ足りない、ということにもなるうか。

「証言の会」と一橋大チームは、きわめて似た志向性を持ちながらも、記録の方法論としての違いもある。『証言』誌は、記録者が聞き書きをすることもあるものの、主眼は被爆者自身の主体的な寄稿である。多くの被爆者自身が書き慣れていないことと、紙幅の制約上、一人一人の手記はそれほど長いものではない。それに対して、一橋大の方は、調査者側が被爆者の生活史を聞き取り、整理、分析までを担当する。人数を絞つて取り上げることで、より詳細な記録とすることができる。もし「漂流」から「抵抗」へ²⁰という、被爆者の「沈黙」「拒否」にも可能性を見出すような定式化が生活史という手法によつてもたらされたとすれば、それは運動と研究の方法論の選択に際しても再考を促すことにもなる²¹。

ただし、これはある意味単純化した整理であり、実際に「証言の会」と一橋大の面々が対話した際には、このような単純化された分け方ではなく、微妙なニュアンスを含んだやりとりが展開されたようである。石田とともに長崎を訪れた栗原淑江が「証言の会」の通信に寄稿した一文では、「被爆者問題研究の方法的わく組として、あるいは国民の被爆体験の思想化の視点としての一般

的意義はともかく、〈漂流〉の否定イコール〈抵抗〉とはなりえない運動の現実に対し、はたして何がなしえたか、と問われると、今後に残された課題の重さにおしつぶされそうな気がします」と記している⁽⁴¹⁾。「漂流」から〈抵抗〉へ」という道筋は、一つの道筋ではあっても実際には簡単には「飛躍」は成し遂げられないであろうことを、提唱した側も感じていたように思われる。

ただ、被爆者の「沈黙」「拒否」にも〈抵抗〉の萌芽を見出すことは可能か、という論点は、一九七四年の福田須磨子の死去によつて停止してしまつた感が強い。福田の著書『われなお生きてあり』やその他の文章を読んで、長年の労苦の過程もしくは労苦の末に彼女が到達した境地に〈抵抗〉を感じることは私にもあるが、ただそれは揺らぎない境地というよりは、再び「沈黙」に引き戻されるかもしれない不安定さをともなつたものではないかとも感じる。石田自身も〈抵抗〉を確固とした状態として、また〈漂流〉から〈抵抗〉への道筋を直線的なものとして主張しているわけではない⁽⁴²⁾。とはいえ、福田の行動や著作を〈抵抗〉として十分といえ、彼女の業績を過小評価し「死者に鞭打つ」ような言動として批判を招きかねない。かつて福田に辛口の評をしたことがある鎌田が、彼女の死後は肯定的なコメントしかしなくなつたのは、そのような遠慮もあつたのか、あるいは評価を修正したのかは定かではないが、前者の要因も否定できないのではなからうか。福田の逝去に際し、『証言』誌第六集（一九七四年）は特集を組み、石田は「原爆体験の思想化について——福田須磨子さんのこと」で、「福田さんはこれら二つの型（漂流）と〈抵抗〉：引用者補足）の思想的営為のもつ人間的意味を、一つはいよいよ深

い絶望と孤独として、一つは人間への信頼と生の肯定として、彼女の限らない苦悩の〈生〉をもつて検証したのである」（六五頁）と意義付けた。鎌田は「さようなら福田さん！」（六七―九頁）という、通夜の席で読んだ詩を掲げて死を悼んだ。

その後、「反原爆」と「思想化」は、特定の被爆者の固有名詞を離れ、一般化された言説として普及していった。「反原爆の思想は、広島・長崎において被爆し、全国に散在する被爆者の戦後三〇年にわたる人類史上未曾有の悲惨と苦悩にみちた生活体験の中から生まれた思想であつた。反原爆の思想は、被爆者≡民衆の生活に根ざし、その体験からにじみ出た民衆の思想であつた。そして、この反原爆思想を民衆から抜き去ることができないのは、反原爆思想の根柢に、原爆死反対の民衆の情念があるからである。（中略）それが民衆の情念に支えられているかぎり、反原爆思想は汎く民衆のうちに浸透し、ひき継がれてゆくであろう」⁽⁴³⁾。この一文の書き手高橋真司は、石田忠らとともに長崎の被爆者の調査をしていた一橋大学の一員であり、この一文を書いたときは長崎造船大学の教員として鎌田の同僚で「長崎の証言の会」会員でもあつた。また、同時期『長崎新聞』に掲載された「反原爆の思想」というコラムは、高橋ら一橋大チームの影響を強く受けている。「広島、長崎で被爆し、生き残つた家族や友人たちが死者の人間復権を求めて、また生存してもなお原爆後障害に苦しんできた三十年の体験や行動の中から芽生え、体系化された思想。哲学者や理論家が科学的に論理付けしたものではなく、民衆の生活に根ざし、民衆の中から生まれた民衆の思想。原爆は地域住民を大量に殺傷し、家庭や職場を奪い、地域社会を崩壊させ、生き残つ

た者にも放射能のいろうんな後障害を与え今なお消滅していない。原爆体験は苦悩そのものであり、被爆者は原爆症と貧困の悪循環を繰り返す。「原爆とは、人間にとつて、いったい、何であるのか」と問い返し、原爆を否定せざるを得なくなる。この原爆否定を民衆が試行錯誤しながら三十年間かき、築き上げ、論理化したもので、今後も成熟しつつある二十世紀の画期的な思想。朝鮮動乱やベトナム戦争で核兵器が用いられなかったのは、反原爆の証言や告発の国際的世論によるものといえるだろう⁽¹⁴⁾。このように、「反原爆の思想」は民衆の思想の生成として七〇年代には高い評価を受けるようになった。

石田の調査枠組みは、一九七七年のNGO被爆問題国際シンポジウムの作業文書の中で重要な役割を果たすことになった。このシンポジウムは日本被団協が「日本被団協の国際活動に飛躍的発展をもたらす決定的な契機となった」と総括している会議である⁽¹⁵⁾。シンポジウムの作業文書Ⅲ「原爆と人間」の「8. 原爆体験の思想化」で石田は、「原爆は人間に対して何をなしたか。そして、人間は原爆に対して何をすべきか」(傍線原文)⁽¹⁶⁾と簡潔な対となる問いを立てる。また、「生活史調査の結果についての若干の予備的考察」と題した文書では、「漂流」と「抵抗」という短い節の中で、「原爆とそれがなすすべての悪に(抵抗)して、それによつてのみ生きていくことのできる思想を形成しよう」と努めている原爆生存者も存在する。たとえその数は少ないとしても、かかる原爆生存者は人間の尊厳を明証しつつけるものというべきではないだろうか。／そうだとすれば、原爆生存者における思想的営為の(型)を検出し、それぞれの(型)のもつ人間的意味を吟味することは、

真に重要なことであると考えられる⁽¹⁷⁾と述べる。ここから導かれる帰結は次のようなものである。「かくて被爆者は死と生の意味を確立しようとする思想的営為のなかにおいて、自らの存在の歴史、社会的意味を把握するのである。彼らの思想は、原爆の劫火をくぐり抜けて生き抜こうとした人間が、その体験にもとづいて、構築してきたものである。それは、いわば、その人間的意味をためされた思想なのである。／そうだとすれば、それは核戦争の危険のもとに生きねばならぬ「未来の犠牲になるかもしれない人類」とつて共有されるべき思想でもあるといわなければならない⁽¹⁸⁾。八木良和が述べたような、被爆者と非被爆者が共通の地平に立つための「人類」概念は、未来の世代を含みこんだものとしてここでは拡張されている。

この国際シンポジウムの準備過程では他にも報告書が作成され、長崎では鎌田定夫が中心となつて作業が進められた。その中の第3章「長崎における原爆と人間」では、「長崎において原爆は市民に何をなしたか、市民は原爆に対して何をなしてきたのか、また、何をなすべきか」ということが、この報告の主題となる⁽¹⁹⁾と書かれている。この一文を見ると、石田忠の主題に「長崎」という限定をつけ、「人間」を「市民」に置き換えたものであることがわかる。また、「思想化」については、終章のタイトル「今後の課題——原爆体験の思想化と継承」に掲げられている。長崎の鎌田らも石田の「思想化」という基調を採用したのである。

「漂流」から(抵抗)へ」という類型化から一九七七年の被爆問題国際シンポジウムに至る石田の仕事について、舟橋喜恵は高い評価を与えている。石田と『死の中の生命』を著した口バー

ト・リフトンを比較してみると、「おなじく精神的傷痕を分析しながら、リフトンとちがつて石田について注目すべきことは、その研究が、非被爆者はどのようなようにして被爆者と共通の立場にたてるか、という実践的課題に答えようとしていることである」と舟橋はいう⁵⁰。「被爆者のことは被爆者にしかわからないと、しばしばいわれるなかで、石田は、個々の被爆体験は、ごく限られた、あるいは部分的なものであること、したがって被爆者自身も自分の体験を他の被爆者の体験とかかわらせてとらえ直し、より客観的に原爆と人間の関係を理解すべきだと主張された。つまり被爆者も自分の体験だけに閉じ込められないで、自分の体験が一面的であることを自覚し、意識的に原爆体験の全体像の構築にとりくまなければならないし、この点では、被爆体験があればあつたで、また被爆体験がなければないで、被爆者も非被爆者も意識的な努力が必要なのである。その意味で両者は共通の努力をしなければならぬのである。被爆者は被爆者であることだけで、被爆者の立場にたてるわけではなく、また「原爆と人間」のテーマもまた被爆者のみに科せられた課題ではなくて、同じように非被爆者にも科せられた課題なのである。被爆者と非被爆者の理論的連帯は、被爆者授護法実現という実践的課題にむけて、その成果を問われようとしている」と結んでいる。舟橋の指摘は、被爆者の「沈黙の壁」を前にした困難は被爆者・非被爆者両方のものであるという筆者の指摘とも重なるもので、だれも単独では見通せないからこそ、「全体像の構築」のため両者の「共通の努力」の重要性を

説いている。前述の八木も舟橋も、非被爆者として被爆者との立場の違いを意識的で、自分の立ち位置を踏まえた上で何ができる

か心を碎くような研究者である。そのような研究者にとつても、石田の仕事は実践的協働を実現したものととして参照されていたのであった。「思想化」の内容とともに、あるいはときにそれ以上に、「立場」の違いの克服が研究者の指針になるものと受け止められたのかもしれない。

石田の「原爆と人間」研究は、その後教え子の浜谷正晴らにも引き継がれ発展していった⁵¹。被団協が一九八五年に被爆者一万三千人を対象に行なつた調査は石田や浜谷ら一橋大チームによつて分析され、被団協の運動に活用された。そのデータの統計集は「原爆体験の思想化」と題され国会図書館などに収められている。このように、石田らの調査は被団協の活動の支えとなるものとして重要な位置を占めてきた。

3 「すべてを相対的に、関連づけて見よう」——鎌田定夫

NGO国際シンポジウム作業文書を作成したころ、石田と鎌田は一緒に研究も行なつていた。石田が代表となつた科研「原爆被害の全体像に関する実証的研究」で、十二人の研究分担者には鎌田も含まれている。この科研報告で鎌田は「被爆表現にみる反核思想の形成」と題した論考を書いている。内容は、原民喜の作品にはじまる文学者の被爆表現からNGO被爆問題シンポジウムまで、石田の「漂流」から「抵抗」へ」にも言及しつつ、「原爆体験の相対化と全体像の認識」を提示しようとするものである⁵²。

共同研究後も、石田ら一橋大のメンバーと「証言の会」のメンバーは関係を継続させた。『証言』誌には石田や浜谷の寄稿や、

彼らの著作の好意的な紹介文などが散見される。では、一九七〇年代の出会いと交流の後、鎌田は石田の研究をそのまま受け入れていたのだろうか。そうではないようである。死の前年二〇〇一年に、鎌田自身が設立した長崎平和研究所の連続講座の席で、鎌田は次のような話をした。

「かつて石田忠先生が福田須磨子の戦後史を研究しながら、彼の研究の論理的枠組みとして「原爆と人間」を設定し、これに関連した本を2冊ぐらい書かれています。私は石田先生と2年ほど共同研究をしたことがあります。そして被爆者こそが、さまざまな矛盾に逢着しながら現代の問題を解く鍵を握っていく、という話になってきたのです。被爆者こそがもつとも人間的に生きるように運命づけられているという表現もあります。私は一方で賛成しながら、本当にそれだけだろうか、と一方では被爆者を相対化し、複眼的に見ようとしていました。これは終戦末期からの私の習性のようなものです」⁽²³⁾。控え目ではあるが、石田とは異なった見解を鎌田が持ち続けていたことがうかがえる。

では、鎌田は石田の議論の何に「本当にそれだけだろうか」と思ったのだろうか。同様の志向を持った者同士ということもあり、鎌田は石田に対して明確に批判めいた書き方はしていない。ただ、主要な論点を提示していると思われる箇所がいくつかある。一点目は、加害／被害の問題と外国人被爆者の存在である。鎌田は「なかでも外国人被爆者が、日本の加害・被害の関係をとく鍵を握っている」と述べている⁽²⁴⁾。二点目は、「被爆者も自分以外の被爆者や自分たちを苦しめた側、落とした側がどうであったのか、を知らなかつたりする。そういうことも含めて相対化し、全体的な

状況のなかで被爆体験をとらえていくことも必要なのではないか」という主旨の舟橋喜恵の言葉を引用しているところである⁽²⁵⁾。ここで鎌田（舟橋）は、被爆者と非被爆者の協働以上のことを述べている。それは「落とした側」をも組み込もうとしている点である。三点目は、「原爆と人間」という見方は感覚的にはわかるけれども、それだけで核兵器をなくすための論理を組み立てることができるのか、ということだ。反核運動は反戦運動、反ファシズムの運動、人権や独裁に対する人間の尊厳を守る闘いと不可分だと私は思っています」⁽²⁶⁾。ということである。運動としての実践的論理や、他の運動との連携を視野に入れての発言である。四点目は、「今まではあまりにも通常戦争と核戦争が切り離されて、核兵器は悪魔の壁で特別に悪い、という感覚でした。これが落とし穴になって、この関連性が見失われてきたのではないか」という出席者からの問題提起に答えて、日本軍の重慶爆撃など「戦略爆撃の思想」や『トルーマン日記』に見られる「戦略思想、軍事問題、政策決定、倫理、これらすべての問題」⁽²⁷⁾を接続しようとしているところである。「すべてを相対的に、関連づけて見よう」⁽²⁸⁾。というのである。

鎌田はこの「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という直前に、「原爆と人間」というかなり抽象的な概念でくくる。それでいくと下手をすると被爆者を絶対化することにつながりかねない」というが、鎌田が抽象化をまったく否定していたというわけではない。鎌田自身、原爆投下を「国際法違反」といえない日本政府と原爆投下を美化するアメリカ政府の両側を批判した「原爆体験の人類的思想化を——アメリカと日本の奇妙な思想化拒否症

候群を撃つ」と題した一文の中で、「それは単なる文化や歴史観の違いの問題ではない。あの戦争と原爆によって真に生命と魂の危機を体験したか否か、真に死者と被害者の立場に立ってあの悲劇を受けとめ、思想化し得たか否か、その根本が問われているのだ。／日本人として、あるいはアメリカ人としての総括、思想化に留まらない。まさに人類的な総括、真に深い人間的な立場に立つ「ヒロシマ・ナガサキ」の世界化、人類的思想形成への実践がいま要求されている、と言わねばならない」と述べている⁽⁵⁹⁾。ここでは「人類」共通のゴールとしての思想化の目標が定められている。ただ、そこに至るまでの過程として、「人類」の間に引かれた境界線を無視することもできなかった。「日本人として、あるいはアメリカ人としての総括、思想化に留まらない」と鎌田がいうとき、それは一枚岩の「人類」へと一挙に「飛躍」するのではなく、外国人被爆者の存在を踏まえた上での「思想形成」が求められている——日本の植民地化の結果として来日した朝鮮人が多数被爆したこと、アメリカ力は同盟国の捕虜がいることを知りながら原爆を投下したこと——と考える方が私にとっては納得できる。

前述のとおり、鎌田が一九七五年に「精神的被爆」を述べた際、それは朝鮮人・中国人被爆者たちを念頭に置いたものだった。鎌田が外国人被爆者の存在を重要視していたことは他の論者もしばしば指摘しており、実際「証言」運動の中でも早くから取り組んでいた。「証言」誌第7集（一九七五年）では、一章を「韓国人被爆者三十年の証言——在韓被爆者調査報告と十二人の証言」にあてており、また同じ一九七五年に「精神的被爆」を述べた先述の

「わが内なるヒロシマ・ナガサキ」も「在韓被爆者医療調査報告書」からの引用で締めくくっている。ただ、鎌田にとって、一九七〇年代は朝鮮人を中心とした外国人被爆者への取り組みとしてはまだ初期段階だったといえるだろう。それは後に深まりを見せしていく。

一九八〇年の時点で鎌田は、一九七七年のNGO国際シンポジウムにふれながらこう述べている。「これらの生活史調査の対象となつたのは日本人の被爆者たちであり、もし対象を外国人に移せば、日本人の場合とは相対的に異なる生活史、精神史のパターンを見出すことができると思われる。あえて言えば、〈漂流〉から〈抵抗〉へという点では、日本人被爆者と共通する意識構造をもちながら、同時に、その体験と意識には、日本軍国主義とアメリカ原爆帝国主義との二重の被害からくる、より複雑な構造が内在しているはずである」⁽⁶⁰⁾。外国人被爆者を対象とすれば、いつもの掘り下げた検討が必要だと主張しているのである。

さらに、一九八二年に鎌田の編集で出版された『被爆朝鮮・韓国人の証言』で、鎌田はこう書いている。「これらの年刊および季刊証言誌『長崎の証言』『季刊ヒロシマ・ナガサキの証言』のこと：引用者補足）の圧倒的部分は、日本人被爆者の証言にさかれている。数的にみれば、日本人証言者約千人に対して、朝鮮・韓国人の証言者は約五十名である。だが質的には、この両者は十分に対抗しうる重さをもっている」⁽⁶¹⁾。数の圧倒的非対称性を前にしてなお朝鮮人被爆者の存在は重いというのである。またこれまで数多くの「証言」集を世に送り出したことについて、「私と同世代の彼や彼女への、私のささやかな供養なのである。それらの証

言集のもっとも深いところ、クライマックスに、本書に登場する朝鮮人・韓国人被爆者たちの証言が位置していることは言うまでもない」とまでいう。⁽³²⁾

この点に関連して印象的なのは、鎌田自身の生い立ちの語り直しである。一九五八年に書かれた「明日に向って」（「時代を生きて」刊行会編『時代を生きて——文集・鎌田定夫』二〇〇六年所収）から前述の「わが内なるヒロシマ・ナガサキ」など、戦時中級友

たちに「鉄拳制裁」を受け虚無的な感情を抱き、戦後どう克服していったかという過程を鎌田はくりかえし書いている。ただ、これら二つの文章では戦時中における朝鮮人の姿は出てこない。それに対し、『被爆朝鮮・韓国人の証言』では、戦時中に軍事動員された際に目にした朝鮮人労働者、掩体壕構築作業の際指導員だった朝鮮人、朝鮮人ではないが朝鮮から転校してきたため「オイ、チョーセン!」と呼ばれた同級生など、「朝鮮」との出会いが書き込まれている。⁽³³⁾ 以前は自分史の中の戦時体験としては書き込む必要を感じなかったであろう鎌田が、朝鮮人被爆者との関係を深めることによって、自らに関係することとして書き直した。書き直すことによってより強靱な「証言」を構成するよう被爆者に求めた鎌田は、同じように自分の思考の深化を書き直したのだといえる。

このような観点から、一九七七年の国際シンポジウムの作業文書を振り返ってみると、あることに気がつく。石田忠が執筆した作業文書Ⅲ「原爆と人間」の「8. 原爆体験の思想化」で外国人被爆者は作業文書Ⅲの付属資料「在外、外国人被爆者について——在韩国被爆者の場合」として扱われ、執筆者も石田ではない。

無視しているのではないものの、主題としては扱われていない。

一方、鎌田らが編集した長崎の報告書でも、「なぜ8月9日、外国人たちが長崎にいたのか。」という一節は設けられているものの、やはり主題として扱われているとはいえない。つまり、七〇年代は外国人被爆者というテーマはまだ深められていく途上であって、前述の鎌田の言にもあるように、その時代における「思想化」は外国人被爆者を組み込んだものとして抽象化されているとはいえないのではないか。⁽³⁴⁾ その点が不十分だと思つたからこそ、七〇年代後半から八〇年代以降、鎌田自身が変わろうとしたのではあるまいか。

またそれは鎌田のみならず、日本人被爆者に対しても向けられる。鎌田らとともに韓国を訪問した沼田鈴子、下平作江らについて、「彼女たちは、韓国の被爆者たちに出会うことで、加害国日本としての責任に目覚めていくのです。これを契機に彼女たちは自分の証言に重ねて、かならず在韓被爆者たちの受難を語り、「あの人たちが生きていてよかったと言える日」のために訴えています」とその姿勢を肯定する。⁽³⁵⁾ 反対に、外国人被爆者より日本人被爆者を優先すべきだというような主張は、鎌田には首肯できないものであった。

「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という姿勢は、何を議論の素材に使うかということにもかかわってくる。その一つが「文学」である。注5でふれたように、石田と鎌田が長崎で面談した際、両者はともに、被爆体験のリアリティに迫るには文学的感性が必要である、という点で意見が一致したそうである。ただ、その後「文学」をどのように論考に取り入れていったのかを見る

と、両者には対照的な側面がある。

私見では、石田の文学的感性がもつともよく發揮されているのは、福田須磨子の手記に〈漂流〉と〈抵抗〉という二つの〈型〉とその二つの〈型〉の間の「飛躍」を読み取った、その解釈の仕方ではないかと思われる。石田は〈漂流〉という言葉を用いたのは彼自身と福田の偶然的「感性の一致」⁽³⁶⁾としていたが、それを〈抵抗〉へと結びつけるのは、石田がいうような論理的「必然」ではなく、彼自身の読みによって感じられる。石田は福田の手記をそのような感性をもって読んだ、ということである。それ以外では、ナチスの強制収容所を生き抜いたフランクルの『夜と霧』と福田の個人史を結びつけた記述、山本和平との対談による「井伏鱒二『黒い雨』を読む」などが文学作品を直接扱ったものである。ただ、この対談の中で石田が「われわれ社会調査家にとれる証言というのはむしろ生存者のそれです。しかしほんとうに欲しいのは——原爆の非道さを知るためには——あのととき死んで行った人たちの証言なのです。死者の証言を聞くためには社会学的手法では到底不可能であり、どうしても文学的想像力にたよらざるをえない」⁽³⁷⁾と述べている箇所は、文学的想像力を重視しながら逆に彼がそこに立ち入らなかつたことをも浮き彫りにする。つまり、生存者の証言としては、彼は面談やアンケートなど社会調査手法で集めたデータに依拠し、文学作品をデータに組み込むことはなかつた。社会調査者としては当然の禁欲的態度ともいえる。

一方鎌田は、拙稿でも述べたように、「証言」の中にフィクションを含めることもいとわなかつた。鎌田の「文学」概念にはノ

ンフィクション（記録文学）とフィクションの両方が入るが、そのどちらも役立つのであれば積極的に取り入れた。フィクションまで含まれるのであれば、その担い手には当然非被爆者も含まれる。鎌田が「証言」に文学を組み込むことは、被爆者も非被爆者も含めた上での総体化であり、彼が「証言」や「思想化」を論じる際には多くの文学作品が言及されることになる。鎌田がくりかえし言及したのは日本人の作品だけではなく、サルトルやカミュらが原爆投下のニュースを聞いて示した反応や、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』、ハーマン・ハゲドーンの『アメリカに落ちた爆弾』などである。ハゲドーンに「被害と加害の交差する問題を人間の感性、良心でとらえた言葉」を見てとる鎌田は、非被爆者の中でも「落とした側」をも組み入れて論じようとしているのである。⁽³⁸⁾

このような発想は、鎌田が「他者」とのやりとりを通しての「思想化」を意識していたことをうかがわせる。一九八〇年代、ほるぶ出版から『日本の原爆文学』集が刊行された際の関連企画として各地で講演会が開催され、その中で鎌田は次のように述べた。

「私たちが戦争と原爆で受けた被害の事実や心の痛手の中に、ぬぐうことのできない共犯と加害の事実をも重ねて描くこと、被害の構造の中に加害の構造が組み込まれ、さらに今日また再生・復活しつつあることをえぐり出すことが、いま必要だと思うのです。そのような全体の構造と状況を押さえた文学によってこそ、初めて他者との対話——若者や他民族との通信が可能になるはずです」⁽³⁹⁾。鎌田自身「他者」という用語はあまり使っていないし、「若者」を他者とするのは異論があるかもしれないが、異質性を

前提としたコミュニケーションのあり方を彼が志向しているのは明らかであろう。

また一九九〇年の論考「文学としての証言——永井隆から本島市長の証言まで」では、副題が示すとおり永井や本島らを論じている。永井と比較して秋月辰一郎の『死の同心円』を高く評価する鎌田は、「いつ被害者から加害者へと転ずるかもしれない自分自身を見さえ、永井のようなカトリック的ロマンチズムへおちいることなく、たえず自分も他者も相対化し、その証言を客観化していく視点を一貫して保ちつづける」⁽⁴⁰⁾と、被爆者の記録文学の中にも相対化や客観化を見出そうとする。最後に「天皇にも戦争責任がある」という発言で銃撃された本島市長を置いているのは、「天皇制にからみとられた」永井隆が回避したものを、本島は真正面から引き受け、「証言者もまた文学の一翼をにないうる」⁽⁴¹⁾。好例と考えたためである。狭い意味での被爆体験にとどまらず戦争責任につなげて「文学」を論じようとする鎌田の「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という姿勢がよく現れている。

このような鎌田の「文学」の引用や読み方は、原爆や戦争（責任）に関係あるものなら何でも、手を広げすぎという印象を読者に与えるかもしれない。あるいは鎌田は読みたいように読んでいるという批判はありうるかもしれない（私が鎌田をそのように読んでいるのかもしれないと同様に）。ただ、社会科学者としてデータの範囲には禁欲的だった石田の「立場」に比べ、国内外の時事情勢を織り込みながら問題意識も拡大させていった鎌田は、そのような限定をつけることがなかったのが特徴的である。

以上に述べたような鎌田の考え方を集約して示していると思わ

れる文章がある。長崎平和研究所の連続講座の約十年前、日本被団協の機関紙に寄稿したものである⁽⁴²⁾。鎌田は「非被爆者が被爆者運動に物申すということはまことに心苦しくおこがましい。しかし、ぜひにとのことで二、三申し上げます」と前置きして、三点を提言した。

第一、日本被団協は「原爆被害者の基本要請」というすぐれた方針、鍛えぬかれた哲学をもっています。それをさらに説得性あるものとするために、原爆被害を二十世紀最大の加害と被害としてとらえるだけでなく、覇権主義と侵略戦争の他のさまざまな加害・被害の複合構造の中でとらえる必要があります。その特殊性を絶対化することなく一般戦争被害者、反原爆運動や環境運動など、核権力を頂点とする現代の構造的暴力のすべての被害者と団結し、草の根からの抵抗運動の先頭に立つてほしい。

第二に、外国人および海外在住の被爆者との協同核実験・原発事故等の全世界のヒバクシャの団結・ネットワークづくりに日本被団協は全力をあげてほしい。

第三に、被爆二世・非被爆者を含めた被爆証言と反核運動継承のための特別の研究と対策が必要です。被爆者援護法と具体的援護体制づくりについてはいままでもありません。生命あるかぎり私も参加します。

鎌田自身、非被爆者としての遠慮がありながらも、「すべての被害者と団結」することを被団協に求めているのは、実際に可能

かどうかはおいておくと、「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という彼の一貫した持論を端的に表している。

4 おわりに

本稿では、被爆者の「沈黙」や「拒否」への対処の仕方と端を発した「証言の会」と一橋大チームとの出会い、その中でも鎌田定夫と石田忠の関係を中心に追ってみた。石田のデータに対する禁欲的姿勢と鎌田の拡張志向（文学作品も使えるものは何でも使う）という違いは、どちらが優れているか、を単純にいえるようなことではない。ただ、「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という鎌田の立場からすると、抽象化が困難になるとはいえるだろう。鎌田自身も「思想化」をいいながら、石田のようにすつきりとした（型）のようなものを提示できなかったのはそのせいであると思われる。

誤解のないようにいえば、石田が加害の問題や外国人被爆者に無関心だったというわけではない。石田は「韓国の人の「原爆を落としてよかった」という発言や、アメリカ人の「パール・ハーバーの報復」という言葉自体は日本人としてうけとめねばならない。私たちの視点をあやまらせぬために。そのあとで出てくるのは戦争責任の問題だ」と発言もしている⁽⁴³⁾。ただ、彼自身の著作の中には朝鮮人被爆者は登場しないし、加害／被害の重層性という論点は「反原爆の思想」の中に組み込まれていない。対して鎌田は、「人間」の中に引かれた境界線や立場の違いを考慮に入れ、差別や植民地主義批判という論点とも重ね合わせようとした。そ

して「すべてを相対的に、関連づけて見よう」というモットーで、他の社会問題・社会運動とも接続しようとした。「被爆者は絶対的な存在ではあるけれども」⁽⁴⁴⁾、いいながら絶対化せず相対化するという、一見矛盾かジレンマに陥っているかのような言い方に、鎌田の姿勢がよく現れている。勝手に想像を膨らませると、鎌田自身は生前本格的に議論を展開することはなかったが、もしいま存命なら、反原爆運動との連携を強く主張したことだろう。

私自身のこだわりでもある非被爆者としての被爆者との関係のあり方については、鎌田の「精神的被爆」や「こころの被爆者」という言葉を読んだ際、鎌田は被爆者との同一化・一体化を志向しているのかとずっと考えていた⁽⁴⁵⁾。しかし、被爆者を絶対的な存在としながらも相対化するという鎌田の姿勢は、やはり非被爆者として被爆者とは一線を画しているのだろうと思う。現代思想研究者の言葉を借りれば、他者に対して「認識しようと歩み寄りつつも、それが決して認識できない存在であることを、不断に確認しつつづける」⁽⁴⁶⁾態度といえるかもしれない。

もちろん、加害／被害の問題にせよ、外国人被爆者のことにせよ、これまですでに何人もが言及してきたことである。その意味では本稿は何ら新しい論点を提示するものではない。ただ、「原爆と人間」をめぐる「思想化」や定式化という課題が一筋縄ではないかというところが、石田と鎌田の違いを通してあらためて垣間見えたという話である。その結果、回り回って、再度向き合うべき課題に戻ってきたような感がある。

一昨年の拙稿で今後の課題としてあげた点を本稿の出発点としたわけだが、本稿はさらに課題を残すことになった。一つ目は、

被爆者の「沈黙」「拒否」をめぐる話が一気に「思想化」へと「飛躍」してしまったためおろそかになったが、被爆者の「沈黙」の意味をあらためて考えることである。近年でもそのような課題に取り組み論考はあるものの⁽⁴⁷⁾、まだ議論の余地は残されている。たとえば、一九七七年の国際シンポジウムの作業文書として鎌田らが作成した報告書には、「長崎」と「沈黙」という一節があり、「戦前・戦時・戦後を通じて、多くの長崎市民が、「現実」を肯定あるいは黙認する中で、戦争と侵略、そして原爆への批判は、おしこめられ、市民の内部に伏流化していった」と書かれている⁽⁴⁸⁾。ここでは概論としてさらりと書かれているにすぎないが、被爆者を「沈黙」へと追いやった社会の具体的な解明こそ非被爆者にとつての思想化につながるものではないかと思う。

二つ目は、一つ目から派生する論点として、非被爆者にとつての思想化ということでは、石田の「被爆者にふれることによつて被爆する」という言、鎌田の「精神的被爆」も十分に展開されているとはいいたい。二人は類まれなるコミットメントによつてその境地に達したのかもしれないが、他の非被爆者にも伝わる具体的な内容を提示する必要がある（被爆者から非被爆者への影響を「被爆」という修辞で表現することの妥当性も含めて）。

三つ目は、これも一、二点目と関連するが、「被爆体験の思想化」は他の論者も含めて議論する必要があるということである。

これも本稿では石田と鎌田に焦点をあてたため他の論者の議論を組み込めなかったが、「思想化」自体は多くの論者が言及し、また論者によつて微妙に意味合いの異なる用い方も見られ、系譜的な見直しも必要であろう⁽⁴⁹⁾。さらにいえば、「思想化」を「人類

的課題」とするならば、米山リサが批判的に述べた「核の普遍主義」⁽⁵⁰⁾とどう向き合うか、という論点は避けられない。

本稿の最後に、私自身が鎌田の「相対化」と「思想化」について思うところを二点述べておく。一点目は「相対化」である。被爆者を絶対化せず非被爆者としての立場や責任・役割などを主張する発想としては理解できる。しかし、絶えず相対化を行なうのであれば、議論の立脚点をどこに求めるのか、また「相対化」をいいながら鎌田は外国人被爆者を「絶対化」しているふしはないか、という疑問は私の中には残っている。この点は、私が鎌田の評価として詰め切れていない部分である。二点目は「思想化」である。「証言の会」関連の文章を読み始めて以来、彼が追い求めてきた「思想化」とは何だったのかをつかみたいと思つてきた。

本稿で論じたように、鎌田はそれを具現しようとしながらも、「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という姿勢のため、「これだ」というようなものを提示するには至らなかったというのが現時点での私の見立てである。ただ、「思想化」や「継承」は、固定されたゴールではなく、絶えず書き換えられていく協働作業のようでもある。ここから先はないものねだりをするのではなく、鎌田や石田の後に残された者が追究すべきことなのだろう⁽⁵¹⁾。

注

1 瀬戸口千枝「なぜ黙ってしまうのか——身障者として生きてきた教え子T子へ」『長崎の証言』一九七〇年、一八〇—一頁。

2 田川清光『炎の中から——被爆衛生兵の証言』長崎の証言刊行委員会、一九七一年、二五一頁。

3 松野秀雄『太陽が落ちる——被爆記者の証言』長崎の証言刊行委員会、一九七三年、一一一頁。

4 「長崎の証言」運営委員会「被爆の深部から発する核告発を——証言運動の質的前進のために」『長崎の証言ニュース』一七号、五頁、一九七三年三月三〇日。

5 山田かん「証言運動の基底にあるもの——「証言の会」との懇談会をめぐって」『長崎の証言ニュース』一六号、一九七三年二月二〇日、二頁。ちなみに山田の一文はこの後このように続く。「それでは何が被爆の体験の思想化とそれの伝承になりうるかについて、この座談の最後に近づいてきた結論のように表現されている。石田先生が（被爆を）「感性的次元でとらえることの出来る接点というのは、やはりあの、こういう被爆者の方にお会いして話をうかがったり、手記を読むということの他に……」を受けて鎌田先生は「それは文学ですよ」と明快に応えられ、石田先生は「文学なんですね、要するにあの、文学作品、芸術作品を通じてですね、で、それはこちらの感性に來ますから、それを依りどころにして、自分のあの、抽象水準の高いレベルでとらえていくということが、その基礎になるような気がするんですね……略」と応えられている（一一三頁）。このやりとりについて山田は「まったく同感」としている。鎌田や石田の「文学」への向き合い方については後述する。なお、やや脱線気味の感想を書く、山田の反省的言辞は、彼が一九五〇年代に『地人』という同人誌に参加していた際、同人たちが「広島にはかすかずの原爆文学が生れているのに、長崎では本格的な原爆文学は見られておりません。これは何に原因するのでしょうか」「一くちに原水爆反対、戦争反対といいますが、私たち文学運動にたずさわ

るものはいたい現実はどういうことをすればよろしいのでしょうか」という問いを文学者たちに投げかけ、返ってきた意見を取り入れて雑誌を充実させようとしたというエピソードを思い起こさせる。

6 石田忠「反原爆——長崎被爆者の生活史」未來社、一九七三年、二一—三頁。

7 八木良和「被爆者の現実をいかに認識するか？——体験者と非体験者の境界線をめぐって」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成——戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年、一八〇頁。

8 同前、一七九頁。

9 鎌田定夫「わが内なるヒロシマ・ナガサキ」広島・長崎の証言の会編『広島・長崎の証言（上）』一九七五年、二四—五頁。

10 ちなみに鎌田は、「ほとんどの被爆者が文章や記録では素人であり、また「つらいこと傷ついたことは忘れない」庶民である。まして、日常ふだんに体験の理論化や思想化を意識しつづける知識人のようにはいかない」（鎌田定夫「反核意識の解体と再組織化」『平和文化研究』二号、一九七九年、七二頁）と、被爆者の自発的な寄稿に頼ることの弱点を認めつつ、「原爆体験記の多くは、ほとんど一回きりのものとして終る。だが、証言仲間や編集者が介入することで証言が持続し、未開・空白の領域に踏みこむことも可能になる。また、一つ一つの記録は素朴なものであつても、運動の中で感覚や表現をきたえ、被爆の本質にせまる硬質の記録へと近づくことも不可能ではない」（鎌田定夫「解説（2）——長崎の原爆体験記録」『日本の原爆文学 14手記／記録』ほるぷ出版、一九八三年、五一—六頁）と、編集者らの介入による克服の可能性についても述べている。記

録の方法論についてはさらに検討の余地があるが、本稿では踏み込めないため、他日を期したい。

11 栗原淑江（原爆）研究の重さ——福田須磨子さんをたずねて『長崎の証言ニュース』二二号、一九七四年一月二〇日、三頁。

12 石田は後年このように書いている。「この〈漂流〉ということばについては、もうひとつ述べておきたいことがあります。六八年の論文（石田忠「原爆被害者の〈立場〉」『思想』五三〇号；引用者補足）は三月に書いて七月に出版されたんですが、ちょうどその頃、福田須磨子さんが『われなのお生きてあり』のなかに、「漂流」ということばを使っていたんです。ほんとに驚きました。福田さんも自分の

ある時期を「漂流」と考えていた。被爆者との感性の一致というのか、福田さんの家で、やあ、やあ、と言いつつたのを今でもよく覚えていますが、「当初、私は、〈漂流〉と〈抵抗〉は被爆者の分類基準になると思っていたんです。ところがそれはそうではない。抵抗の立場に立っている方でも、必ずしもある一つの思想を不動のものとして確立しているわけではない。原爆というのは、そんな生やさしいものではなく、たえず漂流へおしやろうとする力として被爆者に働いているわけです」（石田忠「原爆被害者援護法——反原爆論集Ⅱ」未来社、一九八六年、一四一頁）。

13 高橋真司「反原爆の思想」広島・長崎の証言の会編『広島・長崎の証言（下）』一九七六年、三九四—五頁。

14 『長崎新聞』一九七六年八月一日「原爆メモリー反原爆の思想」。

15 日本被団協ホームページ（二〇一四年七月—三日アクセス）。

16 I S D A J N P C 編集出版委員会編『被爆の実相と被爆者の実情——1977 N G O 被爆問題シンポジウム報告書』朝日イブニングニュース社、一九七八年、一五七頁。

17 同前、二五三頁。

18 同前、一六〇頁。

19 N G O 被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会・長崎報告作成専門委員会編『長崎原爆被害総合報告・1977 原爆被害者の実相——ナガサキレポート』N G O 被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会、一九七七年、八二頁。なお、自身も被爆者の調査を手がけたことがある山手茂は「今年3月14日に長崎準備委員会が発足してから僅か4カ月半の間に、立派な単行本として完成されたこと、しかもこれと併行して募金などの国際シンポジウムの準備活動も

なわれたことは、驚嘆に値する。編集委員会代表・鎌田定夫氏の「あとがき」によれば、「もうこの時期をのがしては、われわれは永遠に世界に訴える機会を逸することになるだろう」という思いを共通にいただいた千数百人の人びとが総力を結集させて、本報告書を完成させたことである。（中略）この『長崎レポート』ほど多くの参加者を結集し、真の意味で総合化された報告書は他に見あたらない」（『日本の科学者』一二巻一—一、一九七七年、四二頁）と絶賛している。

20 舟橋喜恵「原爆被爆者の意味」芝田進午編『戦争と平和の理論』勁草書房、一九九二年、五九—六〇頁。

21 ただし、石田は他の研究者に自分のモデルを押し付けることはなかったそうである。「一橋大学石田ゼミという共同調査グループとして見たときに、多くの調査者が長年にわたりリレーしていく『集団生活史法』によって、被爆者の多様な生活史を丹念に聴きとって

- きたし、石田がその考察において「(漂流)から(抵抗)への(飛躍)」のモデルを強要することはいっさいなかったという」(小倉康嗣「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリテイ——なんのために、どのように表現するか」浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会、二〇一三年、二四八頁(注27))。浜谷正晴からの聞き取りによるとのことである。
- 22 鎌田定夫「被爆表現にみる反核思想の形成」石田忠『原爆被害の全体像に関する実証的研究 その1 昭和53—54年度科学研究費補助金・研究成果報告書』一九八〇年。
- 23 鎌田定夫「核兵器廃絶運動の歴史と課題」『長崎平和研究』一四号、二〇〇二年、二二二—二四頁。
- 24 同前、二二〇頁。
- 25 同前、二二二頁。
- 26 同前、二三八頁。
- 27 同前、二四一—二頁。
- 28 同前、二三八頁。
- 29 鎌田定夫「原爆体験の人類的思想化を——アメリカと日本の奇妙な思想化拒否症候群を撃つ」『ヒロシマ・ナガサキ通信』一二二号、一九九四年二月二五日、三頁。
- 30 鎌田定夫「原爆体験の相対化と原爆被害の全体像——外国人被爆者の被爆構造の分析から」『平和文化研究』三号、一九八〇年、三一頁。
- 31 鎌田定夫編『被爆朝鮮・韓国人の証言』朝日新聞社、一九八二年、九頁。
- 32 同前、二七四—五頁。
- 33 同前、二七一—二頁。
- 34 この点に関連して、福田須磨子の没後、彼女の代表作『われなお生きてあり』に寄せられた批判として、彼女が同居生活していたパートナーを含め朝鮮人(被爆者)のことを「通名で日本人化している」という指摘がある。著者たちは、福田個人の問題というよりも、社会的に朝鮮人を差別視する傾向を見てとり問題にしている(長崎在日朝鮮人の人権を守る会編著『朝鮮人被爆者——ナガサキからの証言』社会評論社、一九八九年、一六六頁)。
- 35 「座談会 被爆四十年代へ——ヒロシマ・ナガサキの視点」『季刊ヒロシマ・ナガサキの証言』一七号、一九八六年二月、二九頁。
- 36 注12参照。
- 37 前掲石田「原爆被害者援護法」一二六頁。
- 38 前掲鎌田「核兵器廃絶運動の歴史と課題」二三七頁。
- 39 鎌田定夫「十五年戦争と原爆文学」ほるぷ出版編集部編『反核——文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四年、二一五頁(この文献については、大内要三「鎌田定夫の活動と理論から学ぶ」『葦牙ジャーナル』四四号、二〇〇三年、から教示を得た)。
- 40 鎌田定夫「文学としての証言——永井隆から本島市長の証言まで」『社会文学』四号、一九九〇年、二八頁。
- 41 同前、二六、三一頁。
- 42 鎌田定夫「被爆者運動への提言 草の根からの抵抗運動の先頭に」『被団協』一五九号、一九九二年四月六日。
- 43 「被爆者運動30年と今後の課題——科学者・市民運動者としての考察」広島・長崎の証言の会編『広島・長崎30年の証言(下)』

未来社、一九七五年、四二九頁。

44 前掲鎌田「核兵器廃絶運動の歴史と課題」二三二頁。

45 この論点を考えるとき、私の念頭から消えないのは、自身も被爆者調査の経験（調査拒否を含む）がある下田平裕身の次のような回顧である。「日本の多くの調査者は、その出発点に当たって、調査する自己と調査対象である他者とを峻別しようとせず、調査の結論部分においては、しばしば自らと対象との（共有性）（同質性）の確認を図ろうとする傾向があるように思えてならない」（下田平裕身「書き散らされたもの」が描く軌跡——〈個〉と〈社会〉をつなぐ不確かな環を求めて——〈調査〉という営みにこだわって」『信州大学経済学論集』五四号、二〇〇六年、五七頁）。

46 高田明典『現代思想のコミュニケーション的転回』筑摩書房、二〇一一年、七六頁。

47 被爆者が沈黙する理由とその意味をまとめた最近の論考として、徳永美生子「被爆1世の沈黙の意味と抵抗——J・パトラーの「自己に関する説明」を手がかりに」『年報社会学論集』二六号、二〇一三年。

48 前掲NGO被爆問題国際シンポジウム長崎準備委員会・長崎報告作成専門委員会編『長崎原爆被害総合報告』九一頁。

49 一例をあげると、広島の人文学研究者として論争に関わってきた一人に松元寛がいる。彼は「被爆体験の風化」という一文で次のよう

に書いている。「私がこれまで用いてきた風化ということばも、世上使われているのと同じようにマイナスの意味を持っているが、それは単なるマイナスではなく、同時に体験の思想化というプラスをはらみうるということである。（中略）二十五年という歳月は、風化を意識させるに足る時間であるとともに、体験の思想化を可能にするに十分な時間でもあった」（松元寛「被爆体験の風化」中国新聞社編『ヒロシマ・25年 広島の記事3』未来社、一九七一年、一六一頁）。通常否定的な意味合いで用いられることが多い「風化」

という現象に肯定的な側面を見出そうとする松元は、それが「思想化」にとってはむしろよいことかもしれないのである。年月による「風化」は余分なものをそぎ落とし、必要な骨子のみを浮かび上がらせるということである。このような見解に対して、鎌田のように「すべてを相対的に、関連づけて見よう」という論はどれだけ有効なのか、他の論者との関係ではどう位置づけられるのか、などである。

50 米山リサ（小沢弘明ほか訳）『広島 記憶のポリテクス』岩波書店、二〇〇五年、二二頁。

51 鎌田のように運動家として功績を残した人物を論ずるには、文字面をたどるだけでは不十分であろうと常々思ってきた。ここまではか論じられないのは筆者の力不足であり、本稿の限界でもある。